第１回出生コホート研究連携ワークショップ～コンソーシアム設立に向けた試み～

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 日本DOHaD学会事務局
	公開日: 2019-08-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐田, 文宏
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003595

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2019 年 第 8 巻 第 3 号　3 頁

シンポジウム１「コホート連携」

第１回出生コホート研究連携ワークショップ
～コンソーシアム設立に向けた試み～

佐田 文宏
中央大学保健センター

出生コホート研究は、DOHaD の概念を実証するための最適の疫学研究とみなされ、欧州諸国では古くから盛んで、長期間のデータの蓄積がある。近年、出生コホート研究が連携し、コンソーシアムを構築し、データ統合やメタアナリシスが行なわれるようになってきた。一方、日本ではこのような連携はほとんどみられなかったが、最近、ライフコース・ヘルスケアの概念を基本とする「先制医療」が提唱され、「ライフステージに応じた健康課題の克服」という視点の施策が重視されるようになってきた。

今回、わが国における出生コホート研究の連携を目指して、日本 DOHaD 学会と DOHaD 疫学セミナーが主催し、2019 年 1 月 29、30 日の２日間、東京で第１回出生コホート研究連携ワークショップを開催した。このワークショップは、シンポジウムとグループワークの２部構成で、全国から出生コホートまたは早期介入研究に従事している 61 人の研究者が参加した。シンポジウムでは、まず、省庁と国立研究開発法人の４人の演者に「わが国の施策と連携」、次に、成人の地域疫学研究に従事している３人の演者に「統合研究とイノベーションの現況と展望」、最後に、出生コホート研究に従事している３人の演者に「わが国の出生コホート研究の連携に向けて」というテーマで講演をしていただいた。グループワークでは、インフラ整備、データ統合、生体試料、データヘルス及び早期介入という５つのテーマに分かれ、日本における出生コホート研究と早期介入研究の連携のための戦略を小グループで議論し、論点をまとめて発表していただいた。

研究者によるこのようなワークショップの開催は、出生コホート研究の連携に関心が集まる契機となった。特に、日本研究開発機構（AMED）から初めて出生コホート連携の公募課題が出され、今後、わが国でも実際に連携を進めていくことができるようになった。